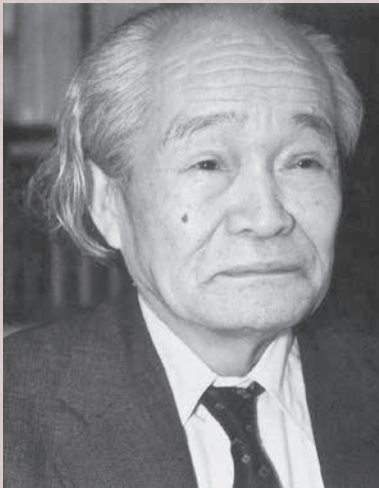


佐藤 雀仙人

さとう じゃくせんじん



佐藤雀仙人 (1909～1997)

福島県伊達郡に生まれた佐藤雀仙人(本名:二郎)は、大正11(1922)年に13歳で野田醤油株式会社に入社し、野田に住居を移しました。

そして、15歳のころから職場の同僚に影響を受けながら俳句をはじめます。このときの筆名は室町秋香。16歳で俳句雑誌「南柯」に投句をはじめます。

昭和14(1939)年30歳のとき、雀仙人は富津の俳人である織本花嬌の旅日記と出会い、彼女と親交のあった小林一茶が下総の地で句を詠み歩いていたことを知ります。ここから、雀仙人のライフワークとも言える「下総と一茶」の執筆が始まりました。下総を歩いた一茶を追いかけたこの連載は、平成8(1996)年に400ページを超える書籍として出版されます。

戦争中の印刷状況が悪化する中でも雀仙人の俳句への情熱は一通りのものではなく、終戦わずか1月後の昭和20(1945)年9月、まだ印刷はおろか紙さえも手に入れることが困難だったときにも、手書きで俳句の回覧誌「野菊」を作っています。

戦後は新俳句人連盟に加わりその活動範囲を広げながら、地元野田でも「俳句文学」を創刊。後に「雑草」となり、雀仙人亡き今も発行され続けて70年を迎えようとしています。

また、勤務先の句会での活動も多く、労働現場を詠む職場俳句においても大きな足跡を残しました。

表題の句は、雀仙人が70代のころの作品で、力強く具象を詠むその作風が感じられます。橋本夢道は句集「鉄骨と雀」の序文において、「現実への認識も高く、具象的表現への努力が、“愛と美”への存在を追求する効果をあげている。」と記しました。ただ「まわす」だけではなく「搏って」こそ火を發す独楽は、雀仙人にとって人生すなわち俳句そのものだったのかもしれませんが。

野田俳句連盟、千葉県俳句作家協会の顧問をつとめるなど、野田地方俳壇の発展に寄与した雀仙人は昭和55(1980)年には野田市文化功労賞を受賞します。

野田の明浄寺には、師である高橋利尚と共に句碑が建立されています。(文中敬称略)

【取材協力】 実籾繁氏／秋尾敏氏

【写真提供】 月刊 とも

【参考文献】 佐藤雀仙人句集／鉄骨と雀／下総と一茶

まわすにはあらず搏つ独楽火を發す

明治42(1909)年 3月12日、福島県伊達郡小綱木村に生まれる
大正11(1922)年 野田醤油株式会社に入社
昭和15(1940)年 株式会社日立製作所に入社
昭和16(1941)年 「下総と一茶」を「南柯」誌上に連載開始
昭和22(1947)年 新俳句人連盟に加盟、同中央委員に選任
昭和22(1947)年 俳句誌「俳句文学」創刊
昭和39(1964)年 句集「鉄骨と雀」出版
昭和44(1969)年 「野田俳諧史」により全国俳誌協会評論賞受賞
昭和55(1980)年 野田市文化功労賞受賞
平成元(1989)年 「佐藤雀仙人句集」出版
平成9(1997)年 88歳で永眠



昭和20年9月発行の「野菊」創刊号



佐藤雀仙人の句碑(明浄寺)